

ゴール型ゲームのボールを持たないときの動きの習得過程について —スリーサークルボールを適用して—

発表者 柴田 真希
指導教員 勝本 真

キーワード：スリーサークルボール、ボールを持たないときの動き、運動学習場面

1. 緒言

小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領では、ゴール型ゲームの内容が「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」に分けられた¹⁾²⁾³⁾。Griffin 他⁴⁾はゲームパフォーマンスを「ボール操作の技術」と「ボールをもたない動き」と定義づけ、『ゲームパフォーマンスを最大限に伸ばそうとするなら、「ボールをもたない動き」を指導すべきである』と述べている。ただ、ゴール型ゲームはコートの中を敵味方が素早く動き回るため、その時の適切な状況判断が難しく、特にゴール型未経験者はどこに動いてよいのか、どのように動いたらよいかわからないという状況になってしまう。このようなボールを持たないときの動きを確実に習得させるためには、学習内容を「誇張」したゲームの工夫が必要になるといわれている⁵⁾。「誇張」されたゲームの一つである岡田らのスリーサークルボールを活用した研究⁶⁾でも、ボールを持たないときの動きの学習に有効性が示されている。ボールを持たないときの動きの習得に関する研究などは学校体育を中心に多種多様に行われてきた。しかし、ボールを持たないときの動きがどのようなつまづき、気づきの下で習得されていくのか研究されたものは、見受けられなかった。

そこで本研究では、スリーサークルボールを行う上で、どのようにボールを持たないときの動きが習得されていくのかを探り、今後学校体育で指導を行う上での一助とすることを目的とした。

2. 研究方法

2-1 調査対象・実験期間

○予備実験

対象者：I大学の女子学生8名
協力者：I大学の女子学生4名(ゴール型経験者)
令和3年11月4日から令和3年11月11日

○本実験

対象者：I大学の男子学生2名(ゴール型未経験者)
協力者：I大学の女子学生4名(ゴール型経験者)
令和3年12月6日から令和3年12月14日

2-3 実験計画

予備実験では、12名を1チーム3人で4チーム構成した。その中で2チームずつの兄弟チームを作

り、スリーサークルボールのゲームを行った。全4回行い、第3回までは兄弟チーム間でのゲームを行い、第4回では相手チームとのゲームを行った。

本実験の計画は表1に示した通りである。攻めのメンバーと守りのメンバーをすべての回において固定して行った。対象者の2人は交互に攻めのメンバーに加わりゲームを行った。

2-4 分析項目

○予備実験

2-4-1 VTRによる映像分析

実験中、学習者が行っているゲーム場面を体育館の上部から定点ビデオカメラで撮影を行った。そのVTR映像を対象としてゲームでの「得点数」「パス回数」「サポート回数」「サポート適切率」「リスタート回数」の変容を分析した。

2-4-2 対象者8名に半構造化インタビュー

毎時間ごとに半構造化インタビューを行った。

○本実験

2-4-1 VTRによる映像分析

予備実験と同じ内容で行った。

2-4-2 授業評価アンケート

毎時間ごとに形成的授業評価を行った。

2-4-3 対象者と研究協力者(守り)に半構造化インタビュー

3. 結果

○予備実験

3-1 ボールを持たないときの動きに関して

VTRによる映像分析の結果、サポート適切率は、第1回と第4回を比較し、対象者8名全員向上を見せた。そして、ボールを持たないときの動きに関する気づきが得られた。

- 1.サークルを意識した動き
- 2.サークルの裏側などコートを広く使う動き
- 3.早い動き
- 4.シュートやパスの後の早い動き
- 5.切り返しの動き
- 6.緩急をつける動き
- 7.ボールに近づく動き
- 8.ディフェンスのいないところに動く動き
- 9.ディフェンスの前に入る動き
- 10.ディフェンスの視野から外れる動き

表1 本実験計画

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
内容	スリーサークルボール (1分ゲーム2本→話し合い) × 3	スリーサークルボール (1分ゲーム2本→2分話し合い) × 4				スリーサークルボール (1分ゲーム2本→話し合い) × 3	
しかけ		指導者介入 ・運動学習場面における指示、言葉かけ ・話し合い活動での言葉かけ、フィードバック					

○本実験

3-1 ゲーム分析の結果

第1回と第7回を比較し、対象者Aチームと対象者Bチームは両チームともに、リスタート数が減少傾向を見せた。

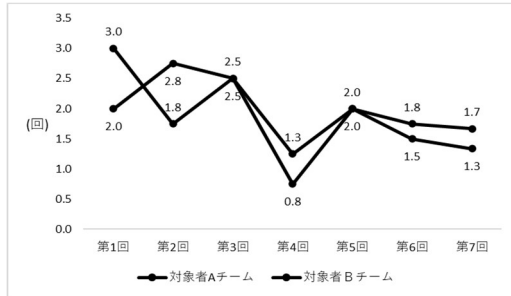


図1 リスタート数の平均の推移

両チームともに、第3回で最高得点を獲得している。しかし、第5回にかけて減少傾向が見られた。

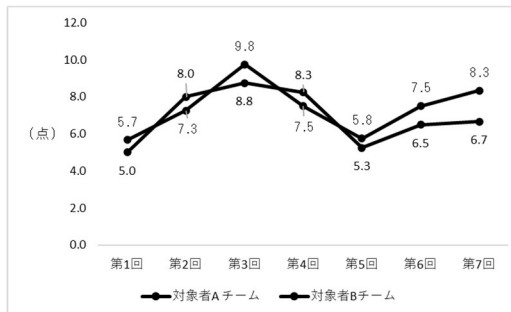


図2 得点数の平均の推移

3-3 形成的授業評価の結果について

図3の結果から、総合評価は高い水準で推移しており、形成的授業評価の診断基準に照らし合わせても5段階評価の「4」や「5」を得られた。

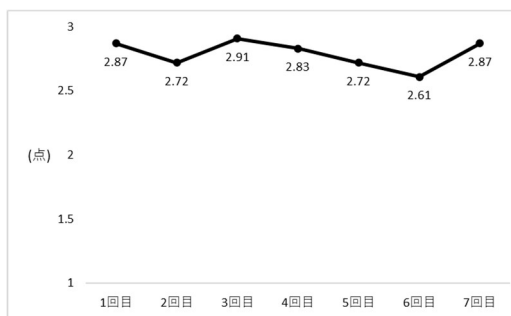


図3 総合評価の推移

4. 考察

4-1 指導に関して

図1のように減少傾向を見せた要因の一つとして運動学習場面における指導者からのミスが減らすような言葉かけや指示が挙げられる。運動学習場面における言葉かけでディフェンスを注視させる内容のものをしたところ、その言葉かけに対して対象者Bのインタビューでは、「自分の動きに夢中になることがあったけど、そのような声をかけてもらって、ディフェンスを見ることができて視野が広がった。」と述べていた。そのため、運動学習場面における指導や指示が対象者の意識に作用したことが考えられる。

4-2 ディフェンスとボールを持たないときの動きについて

ディフェンスの守り方の変化と映像からの分析の結果で関係があると推測される部分が見つかった。インタビューにおいて、第4回からディフェンスの2名が作戦を変えたと述べていた。その作戦を続け、修正をした第5回では、図2が示すようにどちらのチームも得点数の減少が見られた。映像の観察からも、サークルにディフェンスが必ず1人立っており、パス回し等が上手くいっていない、パスを出す場所に困っている姿が見られた。対象者からのインタビューからも、「いくらパスしてもサークルのところにいるからやりづらかった。」と述べていた。オフェンスとしては、第2回、第3回までうまくいっていたプレーが通用しなくなり、つまずきの場面がこの第5回で起きていたと思われる。そこから、より高度なボールを持たないときの動きやその動きを行うための予測や視野が必要になったと推測される。このように、ボールを持たないときの動きの学習にはディフェンスの守り方も関係してくることが示唆された。

「よい体育授業を実現する教師は、こどもの多様なつまずきを見とり、そのつまずきを解決するための有効な手立てを講じている。」⁷⁾とされている。そのため、今回の予備実験や本実験で得られた、対象者が感じたディフェンスの変化によって出たつまずきや気づき等の知見は、実際の学校体育で授業を行う際の一助となるのではないかと考える。

4-3 単元の時間数に関して

図3の結果より、全体を通して学習者から良い評価を得られた教材であったと言える。また形成的授業評価の「成果」の部分でも、第7回で向上を見せていることから、学校体育において授業数を7時間以上で設定をしても子供達の成果を伸ばすことが出来るのではないかと考えられる。今後の課題としてスリーサークルボールを学校体育で行う際に7時間以上の単元で実施し、ボールを持たないときの動きがどの程度向上を見せるのか研究していきたい。

文献

- 1) 文部科学省(2008)小学校学習指導要領体育編
- 2) 文部科学省(2008)中学校学習指導要領保健体育編
- 3) 文部科学省(2009)高等学校学習指導要領保健体育編
- 4) グリフィン, L.L・ミッチェル, S.A・オスリン, J.L.: 高橋健夫他訳(1999)ボール運動の指導プログラム. 大修館書店: 東京. pp. 200
- 5) 岩田靖(2016)ボール運動の教材を創る—ゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探求, 大修館書店: 東京 pp. 35-43
- 6) 岡田雄樹, 末永祐介, 高田大輔, 白旗和也, 高橋健夫(2013)ゴール型ボール運動教材としてのスリーサークルボールの有効性の検討—ゲームパフォーマンスの分析を通して—, スポーツ教育学研究 32(2): 31-46
- 7) 岩田靖・吉野聡・日野克博・近藤友靖(2018)初等体育授業づくり入門, 大修館書店: 東京 pp. 89